

英語を正しく読み取り、自分の考えや意見を持つことができる力を育てる指導の工夫

－ 3 学年の読み物教材における発問を工夫した段階的な指導を通して－

亘理町立吉田中学校 長沼 由香里

1 はじめに

本校3学年では、英語で書かれた文章の概要や要点を独力で捉えることを苦手としている生徒が一定数いる。そこで、題材に関する背景知識（文化的知識）の紹介を含む下記2に示す「段階的な読み取りの手立て」を講じることで、生徒は題材をより意欲的・主体的に読み進め、英語で書かれた文章から情報を読み取ったり、概要や要点を捉えたりする力を育成できると考え、本研究主題を設定した。

本研究では、段階的な読み取りの学習を継続し、ペア活動を多くして互いに教え合ったり確認し合ったりする場面を多く設定した。それにより、多くの生徒は読んだ内容を自分の言葉で説明し、それに関する自分の考えを述べる活動に意欲的に取り組むようになってきた。

2 研究の目的と方法

日常的な話題や社会的な話題について、英文の内容を理解し、自分の意見を持って、他者と意見交換をする。その中で自分の考えを再構築し、深めることで考える力の育成を行う。そのために、英文の情報や、概要、要点を捉えることができる資質・能力を育成する。次のような「段階的な読み取りの手立て」で授業を展開していく。

○ スキーマの指導

文章の内容スキーマ（文章のトピックや内容に関する知識）と文章の形式スキーマ（言語や文章構造に関する知識）に着目した指導をする。

○ 事実発問の指導

文章の情報を正確に取り出す発問をする。パワーポイントなどの視覚資料を示しながら、True/False問題や簡単な英問英答等を行い、書かれている事実を正確に把握することができるよう指導する。

○ 推論発問の指導

筆者の主張や登場人物の気持ち、発言の意図などを問う発問をする。文中から根拠を示しながら、読んだ内容について日本語を用いて自分の言葉で説明させるなどし、文章の本質的な理解ができるよう指導する。

○ 評価発問の指導

読んだ情報についてどう評価するかを問う発問をする。自らの知識や経験に関連付けて考えたり、読んだ内容に対する自分の考えを持ったりできるよう

に指導する。さらに級友との意見交換の場を設定し、多様な考えに触れることができるようにする。

このような活動を通して生徒は何度も本文を読み込み、内容について考えることになる。このことが新出語句や新出表現に慣れ親しむことや、内容を深く理解することになり、総合的な英語力の向上にもつながると考える。発問を工夫した段階的な指導を継続して行うことで、読み取りに意欲的に取り組む生徒を増やしていきたい。そして、英文の内容についてどう思うかを問うことで、単に読み取りに終始するのではなく、常に自分で問い掛けながら読み進める生徒を育成したい。

3 授業実践 I と考察

【単元名 Unit3 Animals on the Red List】

（東京書籍 NEW HORIZON English Course 3）

(1) 単元について

本単元では、人間の活動が世界中の動物の絶滅を招く原因となっていることが紹介され、自分たちに何ができるかを考えさせる流れとなっている。その中でも、アフリカのヒガシローランドゴリラの減少には、密猟、森林伐採、レアメタルの採掘など、いくつもの人間の活動が関わっていることが述べられている。授業実践 I では、絶滅の危機にあるヒガシローランドゴリラについて紹介する学級新聞の概要を読み取り、筆者の主張を自分の言葉で説明する活動や、電子機器の製造に欠かせないレアメタルの採掘がヒガシローランドゴリラの生息地を奪っていることについてどう思うか、自分の考えを持たせる活動を行った。

(2) 具体的な手立て

① スキーマの指導

文章の内容スキーマの理解として、電子機器の画像を視覚資料として提示しながら、スマートフォンやタブレットなどを持っているかどうか、もしそれらが使えなくなったらどう思うかなどを英語で質問し、題材の導入とした。文章の形式スキーマである新出語句の理解や定着を促すために、内容理解のための重要語句を何度も発音させたり、ペアでの単語練習を行ったりした。

② 事実発問の指導

内容理解を促すために、パワーポイントを用いた視覚資料を見せながら英語で本文の内容を説明し、概要や要点が理解できているかどうかを問う英問英

答を行った。また、各段落においてどのようなことが書かれているかをペアで読み取らせ、それを確認しながら文章の概要や要点を把握させた。

③ 推論発問の指導

学級新聞の著者であるジョシュと朝美が読者に伝えたいことは何かを尋ね、文中から根拠を示しながら自分の言葉で説明させた（“What do Asami and Josh want to say through their newspaper?”と発問した）。

生徒からは「絶滅しそうな動物について知り、自分たちにできることを考えてほしい（根拠：It is important to take action now.）」や、「私達がもっと電子機器を使うと、ゴリラの生息地をもっと壊すことになること。（根拠：If we use more devices, more of their habitat may be destroyed.）」といった解答が見られた。

上記の発問に対する「思考・判断・表現」の評価は次のとおりとした。

A：朝美とジョシュが学級新聞の記事を通して伝えなかったことをよく理解し、本文中に書かれていることを根拠として示しながら自分の言葉で説明することができる。

B：朝美とジョシュが学級新聞の記事を通して伝えなかったことをおおむね理解し、本文を基にしながら自分の言葉で説明することができる。

C：教科書本文の内容を個別に確認したり、級友の説明を聞いたりすることで、理解した内容を自分の言葉で説明することができる。

ワークシートの記述内容を評価した。A評価の生徒は2名、B評価の生徒は14名、C評価の生徒は2名だった。

④ 評価発問の指導

電子機器の製造にはレアメタルが必要であり、その採鉱がゴリラの生息地を破壊している現状についてどう思うか、生徒の考えを尋ねた（“Making electronic devices needs special metals. The mining of special metals destroys the gorillas' home. What do you think?”と発問した）。授業では、少なくとも1文は英語で自分の考えを述べるように指導した。生徒は以下のように解答した。

ア：英語と日本語で解答した生徒（13名）

例）I was surprised because I didn't know that.古いスマホなどをリサイクルしてもその金属は取れるから、みんながリサイクルすれば止めることができるかもしれないと思った。

イ：英語だけで解答した生徒（4名）

例）I didn't know that. I was surprised. I think we need to protect gorillas' home and don't use more devices.

ウ：日本語だけで解答した生徒（1名）

例）悪いことだと思います。（以下省略）

生徒は人間の採鉱活動がゴリラの生息地を奪って

いることや、生態系の破壊は人間にも影響を及ぼすことに言及しながら、自分の考えを述べることができた。

(3) 成果と課題（成果：○、課題：●）

① スキーマの指導

○ スマートフォンの画像を見せながら内容の背景を導入することにより、生徒に自分と電子機器との関係を考えさせることができた。

○ ペアでの単語練習により、分からない語句を教え合いながら学習を進める場面が見られた。

● 単元を通しての新出語句の量が多く、生徒は単語の習熟に苦戦していた。どの単語を重点的に練習すべきかを意図的に提示すべきだった。

● 段落の役割をもう少し明示的に指導し、筆者の主張が書かれている段落がどこかを強調しながら確認すべきだった。

② 事実発問の指導

○ パワーポイントによる視覚教材の提示により、比較的スムーズに英問英答が進んだ。

● 文章の内容をペアで読み進める際に、段落ごとに確認したため時間がかかってしまった。また、文章の全体像を把握させるために、段落ごとではなく、全ての段落を通して読ませるという課題を与え、生徒にチャレンジさせる場面を作るべきだった。

③ 推論発問の指導

○ 読み取った内容について、根拠となる英文を示しながら、全員が自分の言葉で説明することができた。

● 時間が足りなくなり、2名の生徒にしか発表させることができず、他の生徒の表現の仕方を吟味したり、自分の解答と比較したりしながらじっくりと考えさせる時間を取ることができなかった。

● B評価の生徒が大多数であったので、A評価の生徒の数を増やすことができるようにすることが必要であったことに加え、C評価の生徒がB評価になるように個別支援を丁寧に行うよう配慮すべきだった。

④ 評価発問の指導

○ ほぼ全員が、少なくとも英文を1文入れて解答することができた。

● 時間が足りなくなり、多くの生徒に発表させて意見を共有する場面を十分に持つことができなかった。

振り返りからは「みんなの意見を聞くことができておもしろかった」「本文中から伝えたかったことについて自分の言葉で説明でき、友達との意見の違いが分かった」という記述が見られ、自分の意見を伝えるために英文を読み、他者の意見を聞いて自分の考えを深めるという本研究のねらいに迫ることができた。

より深い学びにつなげるためには、評価発問につ

いて考える時間を十分に取った上で、より多くの生徒に意見を発表させ、他者の意見と自分の意見を比較したり、学習内容の振り返りの時間を十分に確保したりすることが重要であると考えた。

4 授業実践Ⅱと考察

【単元名 Unit4 Be Prepared and Work Together】
（東京書籍 NEW HORIZON English Course3）

(1) 単元について

本単元では、日本に住む外国人の防災に対する意識調査の結果や、災害時の備えを話題とした対話文を読んだ。その上で、日本で地震にあった外国人の体験談や、日本に住んでいる外国人を対象とした防災支援について英語で書かれた文章の要点を捉え、日本語を用いて自分の言葉で説明させた。日本に住む外国人が災害時に直面する問題について知り、どのように災害に備えるべきかについて、地震の経験がなく、日本語があまり分からない外国人に自分の考えや知識を簡単な英語で伝えるという言語活動を行った。

(2) 具体的な手立て

① スキーマの指導

災害時持ち出し袋の準備や、災害時の連絡方法を家族と決めているかどうかなど、生徒自身の災害時の備えについて英語で質問し、題材の導入とした。新出語句や新出文法を含む重要表現の理解や定着を促すために、ペアでの単語練習を行った。

② 事実発問の指導

日本に住む外国人の地震の体験談の要点や、防災の支援の取組についての情報を正確に取り出す発問をした。簡単な英問英答や正誤問題等を通して、書かれている事実を正確に把握することができるよう指導した。

③ 推論発問の指導

筆者の意図を捉えるために、日本に住んでいる外国人の地震の体験談の紹介を通してテレビ番組が視聴者に伝えたかったことは何かを、文章中から根拠を示しながら日本語を用いて自分の言葉で説明させた（“What did the TV program want to say about case1 and case2?”と発問した）。

ケース1（日本在住のバングラデシュ人男性の体験談）については「外国人にも日本の地震がどのようなものなのか、どこに逃げればいいのかを知ってもらう必要がある。（根拠：I didn't know about it (= the local shelter) until then. After the terrible shaking, we didn't know where to go.）」や「あまり地震を経験したことがない人は、避難所などの場所が分からないため困ってしまうことがある。（根拠：We didn't know where to go.）」「避難訓練をするべき（根拠：We didn't know where to go.）」といった解答が見られた。

ケース2（旅行中に地震にあったフランス人女性の体験談）については、「災害時の最新情報や駅のアナウンスは、日本語だけでなく、英語も取り入れる（根拠：The announcements at the station were in Japanese. We looked on the internet, but all the latest information there was in Japanese, too.）」「アナウンスや最新の情報を日本語だけで行ってしまうと、外国人などが理解できないからパニックになってしまう（根拠：前例と同様）」「外国人でも分かるように、日本語だけでなく英語などでアナウンスしたり、情報をあげたりした方がいい（根拠：前例と同様）」といった解答が見られた。

ほとんどの生徒がケース1と2の要点を捉え、本文中から根拠を示しながら自分の言葉で説明することができた。上記の発問に対する「思考・判断・表現」の評価は次のとおりとした。

A：日本で地震を経験した外国人の体験談の要点を捉え、テレビ番組が伝えたかったことについて、ケース1とケース2の両方とも根拠を示しながら説明することができる。

B：日本で地震を経験した外国人の体験談の要点を捉え、テレビ番組が伝えたかったことについて、ケース1とケース2のいずれかを根拠を示しながら説明することができる。

C：教科書本文の内容を個別に確認したり、級友の説明を聞いたりすることで、理解した内容を自分の言葉で説明することができる。

ワークシートの記述内容を評価した。A評価の生徒は10名、B評価の生徒は8名、C評価の生徒は1名だった。生徒の解答を分析すると、「避難所の場所が分からない外国人がいる」や「災害時のアナウンスや最新の情報が全て日本語だと、外国の人は分からない」といった事実の記述にとどまっている解答もあれば、「避難所の場所を知っておくことが大切」といった、明示的に書かれてはいない文章のメッセージまで読み取って記述している解答も見られた。

④ 評価発問の指導

進学した高校のクラスメイトに外国から来ている生徒がいるとし、地震の経験がなく、日本語があまり分からないその友人が地震に備える際に、どんな手助けができるかを考えさせた（“Imagine you are a high school student. You have some friends from foreign countries in your class. They don't have a lot of experiences of earthquakes in Japan. They are not good at Japanese. What can you do to help them prepare for earthquakes?”と発問した）

英語で解答しやすくするため、解答の際に活用できる表現を例示した。生徒の解答からは、学習した新出文法を用いて自分の考えを英語で伝えようとする意欲が以前よりも強くなったことがうかがえ、今回は全員が英語だけで解答した。新出文法である間

接疑問文等を利用した以下のような解答が見られた。

- ・ I can tell them where the local shelter is.
- ・ I can show them my emergency kit.
- ・ I can tell them my preparation of earthquakes. I tell!
- ・ I can tell them my experience of earthquakes. They can know about earthquakes and prepare an emergency kit.

(3) 成果と課題（○：成果，●：課題）

① スキーマの指導

- 単元の Scene 1 で日本に住む外国人の防災に対する意識調査の結果を読み、同様の質問を生徒にも投げかけて自分の解答と比較させた。題材への興味や関心を高めるとともに、自分にも関わりのあることとして題材を認識させることができた。
- ペアで取り組む単語練習シートに新出文法を含む表現も加えて練習させたことにより、文法の形式や意味の定着が以前よりも高まり、本文の読解を以前よりもスムーズに行える生徒が増えた。

② 事実発問の指導

- 教科書の文章を読む時間をしっかりと取ったことと、パワーポイントによる視覚教材を見ながらの英問英答の形式に慣れてきたことで、以前よりもスムーズに英問英答が進んだ。

③ 推論発問の指導

- ほぼ全員が、根拠となる英文を示しながら読み取った内容を自分の言葉で説明することができた。
- ケース1の解答について、多くの生徒の記述の文末が「知らなかった」「困ってしまう」「必要がある」といった表現になっており、書かれている事実の読み取りの段階にとどまっていた。文章の内容や書き方によって、筆者の意図や文章のメッセージの読み取りやすさに差が出ることも考えられるが、「テレビ番組が何を伝えたかったのか」というメッセージ性を捉えた解答ができるように指導を行うことで、より深い文章の読み取りにつながることを考える。

④ 評価発問の指導

- 解答の際に活用できる文法表現などを例示したことにより、生徒全員が英語で自分の考えを記述することができた。
- 解答時に活用できる表現を例示したことにより、複数の生徒の解答が似通ったものになってしまった。表現の例示は、英語で自分の考えを述べるのが難しい生徒には助けとなるが、その表現に引っ張られ、解答の幅を狭めてしまう可能性もある。日頃から言語活動を行う場面を増やし、支援がなくても自由に使うことができる表現を増やせるようにすることで、教師が例示した表現にとどまらず、自分の考えを英語で述べる力のある育成につながることを考える。

Unit4 の生徒の学習感想としては、「今回習った英

語はとても学びがいのあるものだったと思います。もし近くに外国人が引っ越してきて、災害があった時など助けてあげたいと思いました」「英語で災害のことなどについて話すのは少し難しかったです。外国の人たちは地震がどういうものか知らないということも初めて知りました。外国人も避難しやすいようになったらいいなと思いました」「この單元では、英語で友達などに意見を言ったりして、災害時にどのように外国人に言うべきかを知ることができた。実際に困っている人がいたら、助けてあげたいと思った」といった記述が見られた。

授業実践Ⅰの振り返りと比較すると、英文読解を通して学んだ内容についてどう考えたかが、生徒の感想により多く反映されていた。文章の情報や要点、概要を捉え、それらを自分の言葉で説明し、意見を持つことができるようになってきていると考える。

5 おわりに

授業実践ⅠとⅡを経て、生徒は英文の概要や要点を自分の言葉で説明し、自分の考えを述べる活動に慣れてきた。それに伴って、生徒は以前よりも内容理解ができるようになってきたと思われる。授業実践Ⅰでは、授業の振り返りカードに「難しかった」と書いていた生徒が、授業実践Ⅱでは、読み取りに難しさを感じていることはうかがえたが、「災害時の外国人の体験談、災害に備えた外国人支援の取組について深く知れた」と記述していた。

評価発問の指導を充実させるには、スキーマ、事実発問、推論発問、それぞれの指導を通して、題材について十分に理解させ、自分の考えを持つための土台を整えさせることが大切だと考えた。今後も自分の考えを持ち、伝えることができる力の育成のために、読み取りの授業を充実させていきたい。

【参考文献】

- 三省堂：「推論発問を取り入れた英語リーディング指導：深い読みを促す英語授業」 田中武夫、紺渡弘幸、島田勝正 2011
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター：「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」 中学校外国語 2020

【生徒が書いた文章の掲載の許諾について】

発問に対する生徒の解答や学習感想などは、個人情報保護の観点から、記入生徒名を明記せずに掲載した。なお、氏名を掲載しないことについては、生徒の保護者にその趣旨を説明した上で了解を得るとともに、所属校の校長からも許諾を得た。